

4 発生動向に注意を要する病害虫

1) 近年発生を確認した病害虫

県では、新たな病害虫が認められた場合及び重要な病害虫の発生消長に特異な現象が認められた場合には、特殊報を発表しています。

詳細については、宮城県病害虫防除所のホームページ「過去に発表した特殊報」で確認してください。

※宮城県病害虫防除所のホームページ (<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/byogai/>)

特殊報発表年月日	寄主植物	病害虫名
令和 5 年 7 月 24 日	ナス科植物（トマト、なす、ピーマン、ばれいしょ等） （フェロモントラップ）	トマトキバガ
令和 4 年 12 月 16 日	ネギ	ネギリゾクトニア葉鞘腐敗病
令和 4 年 11 月 18 日	トマト	トマト黄化葉巻病（TYLCV）
令和 3 年 2 月 1 日	ネギ	ネギハモグリバエ（別系統）
令和 2 年 10 月 30 日	トマト	トマト茎えそ病（CSNV）
令和 2 年 8 月 12 日	（フェロモントラップ）	ツマジロクサヨトウ

2) 県内で発生している病害虫のうち、今後の発生に注意を要する病害虫

作物名・病害虫名	注意する理由	発生状況と対策
水稻・紋枯病	近年発生ほ場が増加しており、一部ほ場では多発している。	令和 6 年度は 6 月下旬より発病が見られ、夏場の高温の影響で、8 月以降は病勢が進展した。多発ほ場では、止葉葉鞘まで発病が確認された。 茎葉散布剤の使用目安となる要防除水準は、「ひとめぼれ」で減収率 5 % を許容水準とすると穂ばらみ期の発病株率は 10～18 % 程度となる。また、収穫前の 9 月中旬の発病株率が 40 % 以上の場合、翌年に育苗箱処理剤を用いて予防防除を実施する。
水稻・斑点米カメムシ類 （クモヘリカメムシ）	令和 6 年度は県南部以外でも発生を確認し、本田への侵入も目立った。	令和 6 年度も県南部を中心に、県中部及び県東部でも発生が確認され、特に本田への侵入量が多かった。本虫が発生したほ場では、斑点米被害が多い傾向であった。 水田の薬剤防除は、穂揃期とその 7～10 日後の 2 回防除が基本となるが、登熟中期に発生する幼虫を抑制するため、特に 2 回目の防除が重要となる。また出穂したノビエは増殖地となるため、雑草地の草刈り等を行い、密度を低くする。なお、本種は針葉樹で越冬するため、ほ場近くにスギやヒノキ等がある場合は注意する。

りんご・キンモンホソガ	近年発生は場が増加しており、一部園地では多発している。	春季から被害が確認され、夏季以降に被害が急増する傾向にある。また、近年の温暖化傾向により、発生世代数の増加が懸念され、発生時期の長期化や発生量の増加に注意する必要がある。 発生時期に応じた防除時期の見直しが必要である。
りんご・ナシマルカイガラムシ	近年発生は場が増加しており、一部園地では多発している。	多発園地においては果実被害もみられ、収穫量に影響を及ぼしている。また、寄生が長期化すると、樹勢が低下する。 休眠期や第一世代歩行幼虫発生期の殺虫剤防除に加え、休眠期の粗皮削りといった物理的防除も実施する。
なし・ニセナシサビダニ	近年発生は場が増加しており、一部園地では多発している。	県内の被害の多くは新梢のモザイク症状だが、激しいモザイク症状の葉にさび症状が混在することが多いとの指摘もある。果実にさび症状がみられると、収穫量に影響を及ぼす。 休眠期や生育期間の殺虫剤防除に加え、せん定枝は放置せずに適切に処分するなど、耕種的防除も併せて行う。
トマト・黄化葉巻病	令和4年10月の初確認後も県内における発生地域が拡大している。	タバココナジラミが媒介するトマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV)による病害であり、発生が増加傾向にある。 本病の抑制には、タバココナジラミの防除に加え、健全苗の使用や罹病株の適切な処理等も組み合わせた総合的な防除の実施が重要である。
トマト・トマトキバガ	令和5年7月に初めて県内への侵入を確認。令和6年には数件のトマトで食害が確認されている。	ナス科植物が主要な寄主植物である。トマトでは、茎葉内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になる。果実では、幼虫がせん孔侵入して内部組織を食害する。 農薬による防除が有効だが、海外では抵抗性の発達を確認されており、農薬のローテーション散布、捕殺や被害葉・果実の適切な処分、施設栽培では防虫ネットの展張など、総合的な対策が必要である。

3) 県内未発生の病害虫のうち、今後の発生が懸念される病害虫

作物名・病害虫名	内容
水稻・イネカメムシ	令和7年1月現在、本県では未確認であるが、33府県（東北では福島県）で発生が確認されている。籾の基部を中心に加害し、特に出穂直後の穂を好んで吸汁するため、不稔を引き起こす。稲への嗜好性が高く、出穂の早い早生水田に飛来し、以後周辺で出穂を迎える水田へ順次飛来する。畦畔や水田周辺のイネ科雑草で確認されることは少ない。
キュウリ・退緑黄化病	令和7年1月現在、本県では未確認であるが、28府県（東北では福島県）で発生が確認されている。タバココナジラミが媒介するウリ類退緑黄化ウイルス(CCYV)による病害である。 発病初期は、葉に退緑小斑点を生じ、次第に斑点が増加・癒合し、まだらに黄化拡大して葉脈間が退緑した黄化葉となる。定植直後から収穫終了時まで発生するが、感染時期が早いほど草勢低下による減収が大きい。オンシツコナジラミが媒介するキュウリ黄化病と症状が極めて酷似しており、肉眼での判別は難しい。